

（思い出の先生方）  
クラス担任だった横山先生、放課後毎日プリントで英語の指導をしてくれた高橋先生のお二人は私が中学時代から目指していた大学合格のため大変お力をいただいた恩師です。

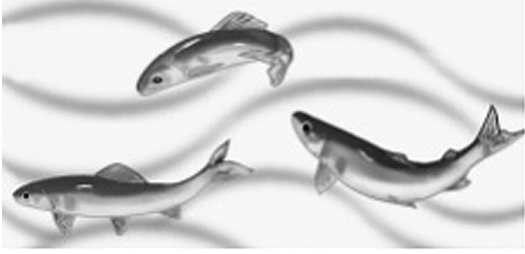
解析Ⅰの小柳先生、解析Ⅱ（一・二年合同クラス）の工藤先生、数学の面白さを教わりました。ありがとうございます。

（その他）

弁当、通学用履物、思い出の女子生徒、美空ひばりプロマイドゴミ箱行き事件等々いろいろありますが、指定字数の都合でここまでといたします。

（あきる野市在住）

※原稿をお願いした赤見さんは、長い歴史を持つ東京村上郷友会の会長を勤めておられます。この会は村上市（岩船郡も含む）の出身者・ゆかりの方のみならず、村上大好き人間ならどなたでも入会できます。「明治一二年、村上人士の東都に在る者十数名、九段坂上草源に会し、親睦を厚くし、郷里の才智を開発し、勉学を奨励せんがため、同郷人の会を創立する」とある創立一三〇



周年にもなる大先輩が作った会ですが、現在も多くの村高同窓生が会員であり役員・幹事を勤めています。

郷友会恒例行事の九月の「三面川の鮎食べる会」と二月の「三面川の鮎食べる会」には沢山の参加があります。特に町おこしで有名になった鮎を食べる会は盛会で地酒の張鶴、大洋盛なども登場して東京にいなながら「鮎・酒・人情 むらかみ」を実感出来る会です。

鮎・鮎を食べる会の他、会員がリリース形式でエッセイを綴るシリーズ「鮎つこ物語」などもHPでご覧になってみてください。

### 『雪女』と言われ

宮 絢子（17回）



村上への月に一度の帰省が恒例化したのはいつの頃からだったろうか。父が亡くなり、弟夫婦に世話になって母の老いの進行を、私は毎月確認している。ある時の帰省から、私は『雪女』と呼ばれることになった。

それは……

二〇一〇年二月五日

夕刻東京駅を発車した「とき」は順調に新潟駅に到着した。ところが、「白新線はただいま除雪中。暫くお待ちください」のアナウンスがあり、待てど暮らせど次の案内は入らず、辺りは深々と冷えてきた。ようやく酒田まで

の代行バス運行の案内が入ったものの、府屋以北の客しか乗せないと言う。途絶えがちな案内、代行バスの不条理、準備の無い待合室などに強く抗議しながら待つこと五時間強。やっと白新線が動いた。「いなほ」は止まり止まりの運転で、村上駅へは翌朝の二時をまわってようやく着いた。

次冬の二〇一〇年一月二四日

盛岡からの秋田新幹線は吹雪の中、順調に秋田まで走った。

だが、乗り継ぐ筈の新潟行き「いなほ」は暴風雪のため運休し酒田駅まで代行バスとなった。大型バスは僅か五人の客を乗せ吹雪の日東道をひた走る。地吹雪で前後左右何も見えない。不安と恐怖の客を運んで、それでも無事に酒田駅に到着した。

酒田駅からは新潟行き「いなほ」が動くと言う。しかし、発車した「いなほ」は五く六分間走行すると停車し、強風が収まるまで何分でも待つという運行状況であった。酒田駅からなんと五時間がかりでようやく村上駅へたどり着くことができた。

二〇一一年一月二五日

村上から東京へ戻る日である。夕刻の東京での会合に間に合う筈の「いなほ」は大幅に遅れていた。村上駅まで送ってくれた弟の車は急遽日東道を新潟駅にひた走り。お陰で予定の新幹線に乗れて会合にも間に合った。

二〇一二年二月三日

前日は寒波来襲で羽越線は終日運休という情報があり、この日は如何にと

ヒヤヒヤもの。例により上越新幹線は一分間の狂いもなく新潟駅に到着した。取り敢えず一時四〇分発の各停村上行きは動いているとの案内を受けホームで待つ。一五分遅れで入線した電車に乗り込み、弁当を広げ箸を付け始めると、「白新線で事故の為、暫く発車出来ません。復旧のメドも立っていません」とアナウンス。大急ぎで弁当をしまい、「こうなれば高速バスだ」と覚悟を決めた。慌てて弁当をたたんだり、降車をしたのは、どうも私だけだったようだ。他の大勢の客はやつと来た電車にそのまま座り続けている。新潟と村上を結ぶ高速バスの存在は聞いていた。待つことほどなくバスが到着した。今回もなぜかわずか五人の客を乗せたバスは雪の壁の中をひた走り一路村上へ。一時間半の旅であった。

訪ねる

度に大雪になる冬の村上行きは私に『雪女』と言う別名を与えた。

『雪女』に甘んじながら、母の待つ村上にあ

と何度行けるのだろう。（練馬区在住）

